

JA全農ウィークリー

J A Z E N - N O H W E E K L Y

2面

**吉見会長が
熊本地震の被災地を訪問**
(広報・調査部)

Web版
JA全農ウィークリーは
こちらから



<https://www.zennoh-weekly.jp/>

5面

**再生二期作の
技術確立を目指して**
(耕種総合対策部)



配送先変更(住所・宛名)、
配布部数変更はこちら



<https://forms.cloud.microsoft/r/uvWgU72VtZ>

全農 ZEN-NOH

食と農を未来へつなぐ。

広報・調査部

吉見会長が熊本地震の被災地を訪問

JA、経済連から被害状況を確認



JAやつしろの濱田組合長にお見舞いを手渡す吉見会長



被災した集送センターを視察する吉見会長

吉見一弥会長と桑田義文理事長は8月13日、令和8年熊本地震の被害を受けたJAやつしろ、JA熊本うき、JAかみましき、JA熊本経済連を訪問し、支援に向け被害状況などを確認しました。

JAやつしろの濱田哲治組合長は「この10年間で4度の災害に見舞われた。消費者に農産物を届けるため連携し乗り越えたい」と話しました。

また、青果物の選果・販売を担うJA熊本経済連の集送センターなども視察し、丁度夫代表理事会長から被害状況の説明を受けました。

吉見会長は、「生産者の生活と営農の再建が重要。被災地のニーズを把握しながら、全農として最大限の支援を進めたい」と決意を述べました。

吉見会長は、「生産者の生活と営農の再建が重要。被災地のニーズを把握しながら、全農として最大限の支援を進めたい」と決意を述べました。

広島県本部

ランナー1000人に藻塩はっさく水、レモン水提供

第27回ひろしまクロスカントリー大会に協賛



スターターを務めた狩谷課長



ランナーに好評だった藻塩はっさく水、レモン水

広島県本部は8月22日に開催された第27回ひろしまクロスカントリー大会にメインスポンサーとして協賛しました。5つのスタートを務めたほか、ゴール後、全ランナー約1000人に「藻塩はっさく水」「藻塩レモン水」を提供しました。

会場は、標高700mの爽やかな高原地帯に広がる芝生の常設クロスカントリーコースを有する道後山高原クロカンプーク。一般ランナーや実業団のトップアスリートらが、起伏に富んだコースを力強く駆け抜け、好レースを繰り広げました。

当日は朝から気温が高く、最高気温が35度を超える厳しい暑さとなる中、参加者に「藻塩はっさく水」と「藻塩レモン水」を提供しました。水分と塩分を同時に補給できることから、多くの方に好評で、おいしく飲んでいただきました。

スターターを務めた広島県本部改革推進課の狩谷伸午課長は、「第1回大会から協賛しており、今年で27回目を迎えます。毎年、地元の有力な実業団選手をはじめ、県内外の中高生が参加する歴史ある大会です。これからも多くの方に参加していただけるよう支援していきたい」と話しました。

広島県本部は今後も、スポーツに励む人々を「ひろしまの食」を通じて応援していきます。

WTTチャンピオンズ横浜2026

卓球選手を 「ニッポンの食」で 応援！



©WTT

表彰式の様子
(左から張本智和選手、
張本美和選手)



「もぐもぐブース」で
商品を手にする
篠塚大登選手

全農は8月4～9日に横浜BUNTAIで開催された卓球の「WTTチャンピオンズ横浜2026」に大会パートナーとして協賛しました。大会期間中は会場でのPR活動を通じて、国内外の卓球ファンに全農の取り組みを発信。世界トップ選手が集う舞台を支えるとともに、食と農の価値を広く伝えました。【広報・調査部】

大会期間中、全農は出場選手を「ニッポンの食」で応援しました。男子は張本智和選手、女子は張本美和選手が優勝し、日本勢の活躍で大会は大いに盛り上がりました。選手のウォームアップエリアには「もぐもぐブース」を設置しました。ブースでは国産米を使用したおにぎりや乳製品、ニッポンエネルギー商品など全農グループ取扱商品を提供し、選手の皆さんのコンディショニングを食の面からサポートしました。試合前後には多くの選手が立ち寄り、エネルギー補給に活用していました。

石川佳純さんが

食事の重要性語る

決勝戦が行われた8月9日には、全農オフィシャルアンバサダーの石川佳純さんがスペシャルゲストとして登場しました。トークセッションでは現役時代に受けた全農の食事サポートを振り返りながら、スポーツにおける食事の重要性を来場者へ伝えました。石川さんが監修した「石川佳純カレー」などが来場者に抽選で当たる企画も実施し、会場を盛り上げました。

会場を盛り上げた

段ボールうちわ

8月8、9日には来場者へ段ボール製うちわを配布しました。全農の段ボール事業への理解促進を目的に製作したもので、本

大会限定デザインとして展開しました。観客の皆さんはうちわを手に選手へ声援を送り、会場を彩りました。全農はこれからも「ニッポンの食」を通じて卓球競技を応援します。

スペシャルゲストの
「全農オフィシャルアンバサダー」の石川さん



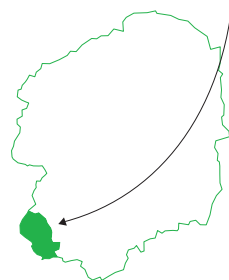
来場者に配布した
段ボール製のうちわ



JA Zoom in

ズームイン 栃木県 JA足利

地域に根差し魅力を発信 花き生産の未来へ一丸



JA足利は、栃木県南西部の足利市を管内としています。北部には足尾山系の支脈が連なり、南部から南東部では、冬の豊かな日照を生かしたトマトやイチゴ、トルコギキョウなどの施設園芸が盛んです。東部では米麦やダイコン、ニン

ジンなどが栽培され、主要7品目をブランド野菜「あしかが美人」として販売しています。

走る広告塔で広がる
地元の恵み

同JAの生産部会で構成する園芸流通協議会は、JAブ

ランド野菜「あしかが美人」の認知度向上と地産地消の推進を目的に、足利市の生活路線バスへラッピング広告を施しました。車体にはブランドロゴのほか、料理レシピ動画を視聴できる二次元コードを掲載し、地域住民へ広く魅力を発信し



みどり認定を受けたトルコギキョウ



二次元コードを掲載したラッピングバス

概要

2026年2月末 現在

正組合員数	3811人
准組合員数	1万129人
職員数	195人
販売品取扱高	32億8千万円
購買品取扱高	14億6千万円
貯金残高	1601億2千万円
長期共済保有高	2153億2千万円
主な農産物	米、麦、トマト、イチゴ、アスパラガス、ダイコン、ニンジン、キュウリ、ナス、花き

ています。

さらに、2026年2月には足利市教育委員会へ学校給食用のイチゴゼリーを贈呈するなど、地域貢献や食育活動にも積極的に取り組んでいます。

花き部会、 環境に配慮した生産で未来へ

環境に配慮した生産で未来へ

JA足利花き部会は、部会員32人で構成し、トルコギキョウやバラ、シンビジウム、ストックなどを生産する部会です。中でもトルコギキョウは北関

東有数の産地として知られ、数々の品評会や市場で高い評価を受けています。出荷は10月から翌年7月まで続き、部会員が一丸となって高品質な花づくりに取り組んでいます。

近年は新規就農者の加入も進み、産地の担い手確保につながっています。部会では栽

培技術の指導や出荷に関する情報の共有など、就農後のアフターフォロー体制も充実しており、経験豊富な生産者が若手生産者を支える環境が整っています。

25年10月には、トルコギキョウとバラを出荷する部会員全員が「みどり認定」を取得しました。化学肥料や農薬の使用低減など、環境に配慮した持続可能な農業への取り組みが評価されたもので、今後も地域環境との調和を図りながら花き生産を進めていきます。

2027年園芸博覧会へ出展

同部会では、27年3月19日から9月26日に横浜市で開催される「2027年国際園芸博覧会」への出展を予定しています。「みどりと生きる足利の未来」をテーマに、環境に配慮した花き生産や地域農業の魅力を全国へ発信する計画です。博覧会への出展を通じて産地のブランド力向上と地域活性化につなげ、足利農業のさらなる発展を目指しています。

再生二期作の 技術確立を 目指して

品質向上へ栽培体系を改善

全農では埼玉県幸手市で、水稻品種「Z R 1」を活用した再生二期作の実証に取り組んでいます。昨年明らかになった課題の改善を目指し、本年は移植時期や施肥体系を見直しました。今回は一期作目の結果と二期作目に向けた取り組みを紹介します。

【耕種総合対策部】

全農は、温暖化によって変化する栽培環境に対応するため、埼玉県幸手市で水稻の再生二期作の実証を進めています。再生二期作とは、一度収穫した稲の切り株から発生するひこばえを再び育て、二回目の収穫を行う栽培技術です。ポイントは「二回目の収穫で高刈りすること」です。

「Z R 1」で実証、

二期作目195キロ/10アール

昨年度は、農研機構と共同育成した水稻品種「Z R 1」を用い、自脱型コンバインを用いて地際から30センチで実証しました。その結果、

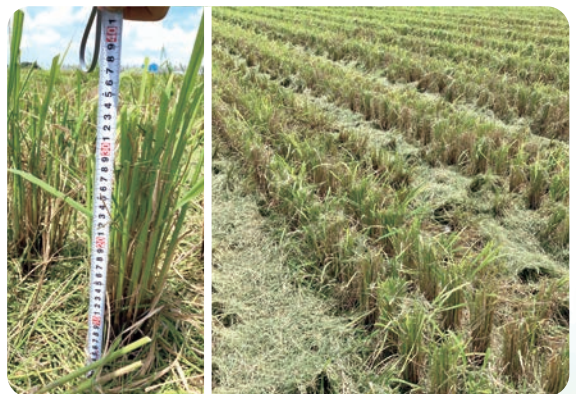
一期作目では656キロ/10アールの収量を確保し、二期作目は195キロ/10アールとなりました。自脱型コンバインでも再生二期作が可能で

あることが分かりましたが、二期作目は登熟期間が不足したため未熟粒が多く発生し、品質面では課題が残る結果となりました。

こうした結果を踏まえ、本年度は二期作目の品質向上を目的に栽培体系を見直しました。具体的には、移植時期を前倒しすることで一期作目の収穫を早め、二期作目の登熟期間を十分に確保することを狙っています。また、追肥量を見直して籾数を適正化し、一粒一粒の充実度を高めることで品質向上も目指しています。

B S 資材使用して
収量、品質を検証

また、本実証では植物細胞に内生し、空气中や土壌中の窒素を固定し、栽培期間を通じて作物にアンモニア態窒素を供給するバイオスティミュラント(B S)資材「エンビタ」を活用した区を設置し、その効果を確認しています。7月上旬時点では期待通りの茎数や籾数を確保しており、生育はおおむね順調に推移しました。エンビタ区では茎数や葉色(SPAD値)の向上も確認されており、今後収量や品質への影響を検証します。



刈り取り後の圃場

8月18日に一期作目の収穫を実施し、自脱型コンバインを用いて地際から30センチの高さで収穫できました。今年度も600キロ/10アールを超える収量を確保できました。今後は追肥を施し、9月中旬にカメムシ防除を予定しています。二期作目の収穫は11月中旬を予定しています。

本技術は、増収だけでなく、将来的な食料需給の変動や異常気象などに備えた生産技術の選択肢を確保することにもつながります。二期作の実施にあたっては、地域の収穫時期と異なることから、収穫物の取り扱い(集出荷対応、販売可能か、銘柄はどうするのかなど)について事前にJ Aと確認してください。



▲刈り取り前の圃場

▲刈り取りの様子

生産者の情熱を未来へつなぐ

全農とJA全青協が描く、新たな連携のかたち

農業は今、大きな転換点に立っています。担い手不足や高齢化、資材価格の高騰、気候変動など、生産現場には厳しい課題が山積しています。一方で、現場には逆風を押し返そうとする若い農業者たちの熱意が確かに息づいています。【広報・調査部】

全農・桑田理事長、
JA全青協・星会長、
北川参与が
対談

今回、全農の桑田義文理理事長と、全国農協青年組織協議会（JA全青協）の星敬介会長、北川敏匡参与が対談。日本農業の未来に向けて、今、何が必要なのか、そして全農とJA全青協が描く、新たな連携のかたちについて、語り合いました。

「誰が農業をするのか」が最大の課題

桑田 私が今、一番強く問題意識を持っているのは、「この先、誰が農業をするのか」ということです。全農は肥料や飼料、燃料、農業資材の供給から販売、物流、商品開発まで幅広い事業を担っています。しかし、そのすべては生産者がいてこそ成り立つものです。生産者がいなくなれば、全農の事業も成り立たなくなります。担い手不足は、全農自身の根幹に関わる問題だと考えています。

北川 全国の青年農業者と接していて感じるのは、決して悲観的な空気ばかりではないということです。集まれば「こんな課題がある」「こんな失敗をした」という話も出ますが、それで終わらない。「じゃあ次はどうするか」をみんなで考える。希望を持って前に進んでいる農業者は多いと思います。

星 私も同じです。確かに農村の人口は減っていますし、地域を支えている高齢世代の負担も大きい。一方で、青年

部には熱意を持った仲間が集まっています。熱い人は熱い人を呼ぶ。そうした仲間と活動していると、「まだやれる」「何かできる」という希望が生まれるんです。

逆風の中でも現場は踏ん張っている

桑田 高齢化、気候変動、資材価格の高騰、さらには国際情勢の変化など、農業を取り巻く環境は厳しさを増しています。それでも現場には、知恵や工夫で逆風を押し返そうとする力がある。そのことに私は大きな敬意を持っています。

北川 最近よく聞くのは、「資材が高い」「必要なものが手に入らない」という声です。実際、農業用マルチフィルムが不足した時には、全国から相談が寄せられました。



日本農業の未来について意見を交わした（左から）北川参与、桑田理事長、星会長
「情熱・心」のポーズで撮影



た。でも現場は諦めません。代替手段を探し、少しでもコストを下げる方法を考えながら営農を続けています。私自身も、採算だけを考えれば、田植えをためらう場面がありました。それでも農地を守りたいという意地があります。

星 米については、今年は正念場です。コスト指標が示され、生産コストを意識した価格形成への期待が高まっています。私たち農業者は長い間、コストを十分に価格へ反映できない状況で頑張ってきました。だからこそ、生産現場の実態を社会に伝えていかなければならないと思います。

桑田 全農としても同じ思いです。需給や品質によって価格が決まるのは事実ですが、生産者がどれだけのコストを負担しているのか、その現実を消費者に理解していただくための努力は続けなければなりません。



一人とのつながりが農業を支える

北川 農業は一人で土や作物と向き合う時間が長い仕事です。私も就農したばかりの頃は、愚痴を言っても聞いてくれないのは土と植物だけでした。でも青年部には仲間がいる。同じ悩みを抱えながら頑張る人が近くにいることが、本当に大きな支えになります。

星 SNSも便利ですが、やはり直接会うことの価値は大きいと思います。人と人が顔を合わせて話し、共感し合う。その積み重ねが地域や農業を支える力になるのではないのでしょうか。

桑田 私は「頻度は嘘をつかない」という言葉を大切にしています。会う回数、話す回数、一緒に行動する回数を重ねるほど関係は深まります。結局、一人でできることには限界があります。だからこそ人とのつながりを大切にしたいですし、JA全青協との接点もさら

に増やしていきたいと思っています。

一 広報と販売で新たな連携を

桑田 これまでJA全青協との連携は、生産資材や農機など生産現場に近い領域が中心でした。今後は、広報や、商品開発、人材育成など、もっと幅広い分野で一緒に取り組みたいと思っています。

星 私たちも同じ考えです。今年度は広報戦略委員会を立ち上げました。SNSや情報発信を強化し、若い世代に農業や青年組織の魅力を届けたいと考えています。全農の発信力と現場の声が結びつければ、さらに大きな力になるはずだ。

北川 農業者から見ると、全農が何をしている組織なのか十分に理解されていない部分もあります。だからこそ、広報でも販売でも、まずは一緒に成功体験をつくるのが大切だと思います。接点が増えれば、お互いへの理解も深まっていくはずだ。

「情熱一心」

「情熱を二つに未来へ」

星 今年のJA全青協のテーマは「情熱一心」です。青年組織の原点は情熱にあります。全国の仲間が心を一つにし、自分の役割に情熱を持って向き合う。その思いを込めました。

北川 その思いは、JAグループ全体とも共有できると思います。農業者だけでなく、支える側も含めて力を合わせるのが大切です。

桑田 農家がJAをつくり、JAが全農をつくりました。つまり全農をつくったのは生産者の皆さんです。だから遠慮なく声を届けてほしい。全農は「食と農を未来へつなぐ」という使命のもと、JA全青協の皆さんとともに歩んでいきたいと思っています。今回の対話を通じて、目指す方向は同じだと確信しました。日本農業の未来に向けて、これからも共に前進していきましょう。

編集後記

担い手不足や資材高騰など厳しい課題が続く中でも、今回の座談会では「農業の未来を支えるのは人」という共通の思いが何度も語られました。

JA全青協の仲間づくりの力と、全農の持つ機能やネットワークが連携することで、新たな可能性が生まれようとしています。特に広報や商品開発、人材育成など、生産現場の枠を超えた協力への期待が強く感じられました。

印象的だったのは、「熱い人は熱い人を呼ぶ」「頻度は嘘をつかない」という言葉に象徴される、人と人とのつながりの大切さです。「情熱一心」のもと、全農とJA全青協がともに歩むその先に、日本農業の明るい未来が見えてきたように感じられました。

日本香堂と
お線香を
共同開発



「かたりべ マンゴー」
バラ詰



「かたりべ マンゴー」
ミニ



「かたりべ シャインマスカット」
ミニ



「かたりべ 白桃」
ミニ

「ニッポンエール かたりべ マンゴー」新発売

全農と(株)日本香堂は「ニッポンエールかたりべ マンゴー」を共同開発し、日本香堂を販売者として全国の量販店で9月4日より発売しています。【営業開発部】

日本香堂のお線香「かたりべ」シリーズは、煙を抑えながらも豊かな香りをしっかりと感じられるため、ご供養用から日常使いまで幅広く楽しめます。

「かたりべ マンゴー」は、クリーミーな甘みとジューシーな酸味が調和した、南国の恵みを凝縮したような濃密で鮮やかなマンゴーの香りを表現しました。さらに今年3月に発売した「かたりべ シャインマスカット」「かたりべ 白桃」を含む3種類について、手に取りやすいミニサイズを同時発売します。

全農は、国産農畜産物の消費拡大や生産振興に向けて、今後も「ニッポンエール」の取り組みを全国の産地・品目に拡大していきます。

第24回もち米
生産団地会議

国産の安定生産・ 安定供給へ意見交換

全農は8月6、7日、JAビルで「第24回もち米生産団地会議」を開催しました。会議には全国のもち米生産団地のJA関係者が出席しました。【米穀部】

JAグループでは、安定した品質と数量のもち米を確保するため、地域ごとに「もち米生産団地」を組織し、生産・出荷に取り組んでいます。本会議は、もち米の集荷・販売を担う県本部や県連・県JAと、生産現場を担うJAで毎年開催しており、今回で24回目を迎えました。

本会から現在のもち米の販売状況を報告し、生産団地からは離農の深刻化や生産コストの上昇、倉庫事情の逼迫など、生産現場が抱える諸課題について活発に議論しました。特別企画として、もち米主産地である北海道出身の東野秀樹参議院議員を招き、農政報告をいただくとともに、もち米の生産・流通を取り巻く課題や今後の対応方向について意見交換をしました。

全農は、今後も関係者との連携を強化し、国産もち米の安定生産・安定供給に向け、課題解決と消費拡大に取り組めます。



国産もち米について意見を交わした参加者



4,600円
(税込)



JA全農の産地直送
通販サイト

JAタウン
ショップ紹介

高級食材として知られる丹波黒大豆を枝豆として9月から楽しめるよう改良した「紫ずきん」。

京都を代表する秋の味覚として親しまれ、「京のブランド産品」に認証されています。

豆の薄皮が薄紫色をしていることや、豆の形が頭巾のように見えることから「紫ずきん」と名付けられました。

サヤと粒が非常に大きく、コクのある甘みともちもちとした食感が特長です。十分に甘みがのった大粒のものを厳選してお届けします。おかずの一品やお酒のおつまみとして、ぜひご賞味ください。

JA全農京都ショップ 紫ずきん 秀品 (180g×5袋)

(JAタウンはこちら) <https://www.ja-town.com>
(お問い合わせは) shop@ja-town1.com

ご注文は
こちらから

